

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：12701
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520015
 研究課題名（和文）近現代ロシアにおける存在論的な意識・知性理解と倫理的関心についての研究
 研究課題名（英文）On ontological understandings of consciousness/intelligence and ethical concerns in modern Russia
 研究代表者
 大須賀 史和（OSUKA FUMIKAZU）
 横浜国立大学・教育人間科学部・教授
 研究者番号：30302897

研究成果の概要（和文）：

本研究計画では、A. ローゼフの言語論の分析から、その「存在論的転回」とも呼ぶべき構想の意味を明らかにした。知性や意識は単なる認識主観ではなく、同時に言語や記号として客観的な存在となった意味としての自己への相関の行為として捉えられる。ここから、認識、志向、感情という知的活動と共に、言語や記号の交換を通じた社会性が基礎づけられていることを明らかにし、またこうした存在重視の傾向がソ連時代にも見られることを確認した。

研究成果の概要（英文）：

This research analyzed Losev's philosophical theory of language, primarily his "ontological turn." Intelligence and consciousness are not only recognizing subjects, but also have correlation with self as objectified meanings in words or signs. There as well as the basis of recognition, intention and feelings as intellectual activities, human sociality in the exchange of words, or signs were found. The same ontological intentions were identified in the Soviet era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：ロシア、存在論、倫理、意識、知性

1. 研究開始当初の背景

19世紀末から20世紀初頭のロシアにおいては、東方キリスト教的な世界観を哲学的に再構築する宗教哲学が興隆したことが広く知られている。だが、この分野の研究

は社会主義体制下で宗教を抑圧する政策がとられていたこともあり、ソ連時代には十分な発展を見ることはなかった。そして、ソ連崩壊後のこの20年の間によりやう本格的に研究が進展をみせることとなった。

ロシアにおける宗教哲学的営為においては、単に神学的知識の普及や拡大が目指されていたのではなく、むしろ近代的な哲学の知見を援用しつつ、信と知の調和的なあり方を模索することが目標とされていた。この背景には、根強い正教信仰が存在していたにもかかわらず、一方で神学研究が伝統的に大きく欠如していた歴史的状況がある。

こうした状況の中で、本研究計画で着目しているローセフは東方正教の静寂主義的な伝統をベースとして、現象学や弁証法的な哲学などを援用した、極めてユニークな言語論や美学論などを展開している。ローセフの著作が広く知られるようになったのも1990年代半ばからである。それば個別の哲学的問題領域としての言語論に閉塞したものではなく、言語を「物」として捉える独特な存在論的観点を備えたものであった。また、存在するもののありようを捉えるにとどまらず、あるべき存在への志向をも内在したものであり、一定の社会改革的な動きとも呼応するなど、倫理的関心も伴うものであることが明らかとなってきた。

こうした哲学的試みの内実を明らかにすると共に、革命後のソ連哲学に見られた存在論的関心との連関についても一定の考察を加えつつ、ロシア哲学の一面を明らかにすることが求められていたことが本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究では、ローセフが存在における意味の現象学とも言うべき思考を展開していたことに焦点を当て、その中で存在と知識、あるいは存在と知性を一体的に理解しようとする哲学的問題関心の内実を明らかにすることを第一の目的とした。とりわけ、そこにどのような理論的枠組みがあり、またどのように理論的な内実が構築されていたのかをロシア語の原典テキストの読解を通じて明らかにするものである。その際には、ローセフが言語論の枠組みにおいて構想していた存在論的な知性理解と倫理的関心の構造の解明と一つの軸とした。

また、これと平行して、プラトンなどの古典哲学の知見やヘーゲルの弁証法的哲学、さらにはフッサールの現象学など、ローセフが参照していた哲学的知見の応用の状況を明らかにすることも重要な目的である。

さらに、1960年代にローセフと同じようにヘーゲル哲学やフッサール現象学などの知見を援用しつつ、ソ連で採用されていた唯物論的哲学に新たな境地を示したイリエンコフやママルダシヴィリなども一定の存在論的関心を示していたことが明らかにされていることから、これらの一部について

比較検討を行うことを第二の目的とした。

革命後には、それ以前に見られた哲学的傾向は一般的には徐々に影響力を失ったと考えられるものの、ローセフのように革命以前からソ連時代を通じて研究活動を行った論者がいることから、直接的には宗教哲学的な問題枠組みを用いていないとしても、理論的には相似的な構想が提起されているように思われるケースが存在している。こうした比較作業によって、歴史的影響関係と言うよりも、理論的に相通的な構想がどのようにして現れてくるのか、それがロシアに広く見られる存在論的傾向という把握の妥当性を明らかにする可能性があると考えた。

3. 研究の方法

研究の方法としては、既存の研究の蓄積の上に立った新たな知見の獲得を念頭に置き、ロシアの文書館等に所蔵されている未入手の文献資料等を収集し、主要なテキストを分析することに加え、ロシアなどの研究者とのディスカッションによって深く考察することを主たる方法とした。

このため、2010年度は9月と3月に、また2011年度にも9月にロシア連邦モスクワ市のロシア国立図書館および歴史図書館、サンクト＝ペテルブルク市のロシア公共図書館において資料調査を行い、主要な文献を収集した。また、2011年度の2月、および2012年度の3月にも研究論文の執筆等で必要となった補足調査を行った。

文献の分析においては、基本的に邦訳の存在していない資料を使用していることもあり、基本文献の翻訳も作成し、それを公開することで研究を検証できるよう配慮した。それらの一部については、資料集として刊行した。

4. 研究成果

ローセフの存在論的な知性理解については一定の水準で解明ができたと考える。静寂主義においては、神の名を祈る中で現れる光を神のエネルゲイアと考えるが、ローセフはこれをイデア論的に解釈することで、本質が他なる存在に受肉する理路として再構成している。具体的な存在はそれが何であるかという本質を内包していると捉えることもできるが、これを逆転させて、本質や意味が自らとは異質な「物」に宿り、そこで自らを表現していると捉えることも可能である。ローセフは後者の立場から物と本質の関係を徹底的に捉え直そうとしているのである。これは「名」や「言葉」などが、音や紙に書かれた文字などの存在の中で意味を持つという「記号」のあり方の説明ともなっている。そこで重要なのは音や

文字という媒体ではなく、伝達される意味である。この意味が音や文字において自らを表示しているという発想をあらゆる事物のあり方の元型とするのである。

この意味を中心とする見地からは、存在化された本質が意味としての自己と相関することが知性そのものであるとされることになる。意味が先行し、それを表示する物が後からあてがわれ、それが意味を表示しているとすれば、意味の「認識」とは意味が自らを十分に表示しえていることの確認としての自己認識となる。この自己相関が知性の基盤だとされるのである。また、この観点からは、この表示のあるべき形を「志向」することや、表示されている結果を自ら受け取り、それに反応する「感情」の契機も導かれている。さらには、存在化された本質やこの自己相関としての知性を内在する言葉や記号が社会的に交換されることによってコミュニケーションが行われているという事実から、人間の社会性も直接的に根拠付けられることになる。このような構想は「存在論的転回」とも呼びうるものであり、こうした構想がロシア宗教哲学の一つの到達点であったと考えられる。

ママルダシヴィリとイリエンコフについては、本格的な比較研究の準備段階として、それぞれに特徴のある立論の分析を行った。ママルダシヴィリは科学的な発見のような知識の獲得を、ある特定の個人という存在における特異的な知の発生として捉えており、この一回性に個人という存在の超越的契機の源泉を見ようとしている。ここから、デカルトやカントなどの哲学の再検討に向かうという点で、ソ連時代の唯物論的で必然論的な傾向の哲学とは異なる理路を探り当てようとしていたことが窺われる結果が得られた。

また、イリエンコフは人間が他の外的な存在と関わる実践的活動を通じて対象を理解していくことが理念の獲得であると捉えている。彼は用語の上では唯物論的な反映論を保持しているが、人間と対象はその相互関係の中で、存在者としての互いの存在性格（とそれによる行動のあり方）に従う形で認識や知識を獲得すると見ていることになる。これは認識を相互浸透的な行為として捉えた帝政期の宗教哲学における存在論的認識論と同じ傾向を示しているとも言えるため、一定の比較研究の基盤が得られたと考えている。

ソ連時代の存在論的な哲学の研究については今後幅広く検討すべき余地が大きいことが判明しており、今回の成果に依拠しつつ、今後さらなる研究を展開することを目指している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①大須賀史和、「ローゼフの言語哲学における知性論と社会性をめぐって」日本ロシア思想史学会『ロシア思想史研究』、査読有、第3号(通算7号)、2012年、11-28頁。

②大須賀史和、「『名の哲学』におけるシンボル=エネルギー理論とその広がり」日本ロシア思想史学会『ロシア思想史研究』、査読有、第1号(通算5号)、2010年、37-46頁。

③大須賀史和、「*Actualité de la philosophie du langage d'A.F. Losev*」, *Slavica occitania*, 査読有、N31, 2010, 45-55.

[学会発表] (計3件)

①大須賀史和、「近現代ロシア思想の「百年の問い」」、日本ロシア思想史学会、2012年8月23日、横浜国立大学

②大須賀史和、「ベルジャーエフの思想と亡命」、日本ロシア思想史学会、2011年1月29日、早稲田大学

③大須賀史和、「ロシアの哲学・思想における古典 —20世紀初頭を中心に」、日本スラヴ人文学会、2010年7月10日、東京外国語大学

[図書] (計2件)

①沼野光義他編、東京大学出版会、『ユーラシア世界2 ディアスポラ論』、2012年、51-77頁

②神奈川大学人文科学研究所編、御茶の水書房、『グローバル化の中の日本文化』、2012年、113-135頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大須賀 史和 (OSUKA FUMIKAZU)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：30302897

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：